

東大生が日本を 100 人の島に例えたら 面白いほど経済がわかった! ムギタロー著

単行本：256 ページ

出版：サンクチュアリ出版

価格：1,540 円 (税込)

はじめに

俯瞰的な視点で経済を解説する本は多々ありますが、内容が難解であるものも少なくありません。経済を学び直す、あるいは新人が持っていて欲しい教養としての学習をするのであれば、この書籍を入門書前の準備運動としてオススメします。

お金にはなぜ価値があるのか？

私たちが普段から使っている「お金」。そもそもこのお金とはどういうものなのでしょう。筆者は次のように説明しています。

- ・モノやサービスの価値を表現するもの
- ・その価値を保存できる
- ・持ち運びに便利でモノやサービスと交換できる

これは何を意味しているかといえば、お金に対して「皆が価値」を感じ、その価値がすぐ消えないことを指します。しかし、お金がモノやサービスと交換できる引換券という位置づけに過ぎなかったら、皆が価値を感じる存在にはなりません。そこで本書で登場する「100 人の島の政府」は次のようなルールを設定します。

毎年、政府に「税」として 1 万円を支払わないと公務員が逮捕して財産を奪って刑務所に入れます。

これにより、逮捕されたくない島の住民は毎年 1 万円を稼がなくてはならなくなり、お金がただの引換券ではなく、税として政府に渡すと逮捕を免れられる券になり、最終的に「お金は価値があるものだ」という認識になると説明しています。

税は国を運営する財源ではない

国は毎年、新しいお金を印刷しています。そのお金は公務員の給与や働けなくなった人の生活費や道路や施設

の建設費に使います。つまり国の運営費です。それでは毎年住民から集めた 1 万円を運営費にしているのでしょうか？実は少し違います。最初に税のルールを宣言した後、「公務員には月 20 万円あげるよ」「道路を整備したら 200 万円あげるよ」などお金を印刷して国の方から先に配り、その一部を税として回収するという流れで、お金を全体に行き渡らせることができます。そして税にはさらに「偏ったところからお金を回収しバランスを取る」という役割や「環境や健康に好ましくない物に重い税を設定するなど、望ましくない行動を抑制する」といった役割もあります。

国の大切な仕事は弱者救済

国の目的は住民が幸せに暮らせることです。そのために利便性や防災などはもちろんのことですが、「弱い立場の住民を助ける」ということはとても重要だと筆者は説明しています。

社会的弱者を切り捨てる社会とは、「怪我や病気で仕事ができなくなった瞬間に見捨てられる社会」を意味します。

こうなると人々はリスクを取りたがらず消費は落ち込み、新しい技術発展が阻害されます。そして当然のように治安も悪化してしまいます。

ここまででまだ冒頭部分ですが、全編に渡ってとても分かりやすく、事例も旬なものや有名なものをモチーフにしているのでとてもわかりやすい内容です。最後に筆者は次にメッセージを読者に送っています。ご興味ある方はぜひお読みになられてみてください。

「税が財源でないこと」や「大事なのはお金の数字の大きさではなく、人や技術や実物的なモノであること」がきちんと理解されるようになればきっと世界は変わると思います。